

ニューベーシックセッション

座長集約

今回、CTサミットのテーマは「次世代イメージングへの追求」であり、新たな技術、研究を共有することをメインに当番世話人である梁川範幸氏がプログラム構成した。CTの新しい技術を適切に使用するには、その技術に対応した基礎知識を理解することが重要であり、午前中のニューベーシックセッションでは、現在普及しているCT装置や、読影環境におけるさまざまなCT検査の標準的な撮影方法を理解することを主題に、2015年9月に改訂された「X線CT撮影における標準化～ GALACTIC ～（改訂2版）」（以下、GALACTIC）発刊にご尽力された3名の方に講演していただいた。千葉市立海浜病院の高木 卓氏には今回の日本放射線技術学会の調

座長集約

ガイドラインの作成は本当に難しい。その理由は、制定するにはまず基準を決定しなければならず、それにはエビデンスや学会としての考え方を根幹としなければならないからである。

高木 卓氏からは、X線CT撮影の標準化改訂において特に小児領域において日本医学放射線学会などの「エビデンスに基づく画像診断ガイドライン-2007」や医療被ばく研究情報ネットワーク（J-RIME）のDRLs 2015の算定などを参考に画質決定をしたと説明があった。周知のように、標準化は部位、疾患別や推奨レベルごとに決定するので専門医の意見を参考にあらゆる観点からの定義づけを行ったことがうかがえる。

吉川秀司氏の「エビデンスに基づいたCT撮影技術」は数

平野 透 札幌医科大学附属病院放射線部

査研究班の班長として改訂の趣旨や概要を、大阪医科大学附属病院の吉川秀司氏は腹部領域の造影CT検査におけるCTの自動露出機構（auto exposure index：AEC）の具体的な設定方法、造影剤の至適タイミングや造影剤投与法を、りんくう総合医療センターの西池成章氏からは救急領域という特別な領域での撮影、画像再構成や画像処理について報告をいただいた。患者が受ける医療は病院の規模や設備、診療体制によって標準化が難しい場合もあるが、原則どこで受けても同じ医療を受けられるべきと思っており、今回のGALACTICはCT検査の根幹になる部分と感じた。

大沢 一彰 済生会中和病院放射線科

値設定に至った経緯が整理され、理解しやすい内容であった。日本の診療放射線技師は海外の物理士としての役割も兼務しており、物理、理学的見地から専門医を納得させることができるデータを示せることを目標としたいものである。それには、診療放射線技師の地位向上に向けてのさらなる実績や社会貢献が必要であろう。

西池成章氏の発表にあった救急外傷における全身CTにおいては、高エネルギー外傷の検査の問題となる体動や時間的要素にかかわるピッチファクター（PF）の検証が完結されておらず、一番参考にしたかった部分でもあり非常に残念であった。今後の検証を期待するものである。